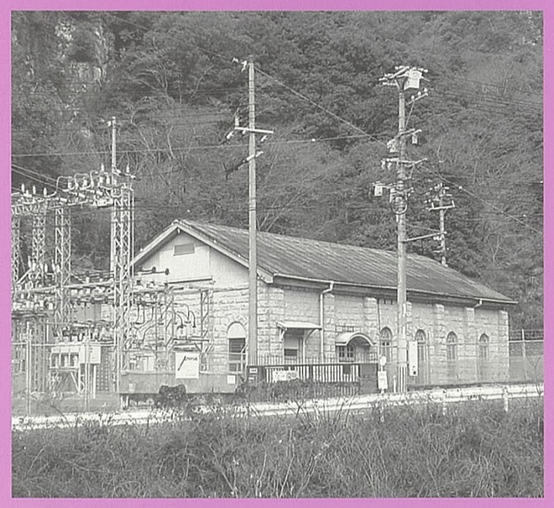
深山変電所本館

（河内町中河内、登録日：平成19年5月15日）

椋梨川沿いに所在する中国電力株式会社深山変電所本館は、大正7(1918)年に旧広島電燈株式会社椋梨川発電所の本館として建設された石造平屋建の建物です。

建物は、東面する南北に長い切妻造で、桁行6間（約20m）、梁間3間（約10m）を測ります。壁面は、瘤出仕上げの花崗岩を布積みで築き、周囲に配した半円アーチ形の窓の間には石積の柱(控壁)を付けています。東側が正面となり、南寄りの2間にはアーチ型の出入口、北寄りの4間は半円形のアーチ窓を設けています。背面となる西側は、現在南寄りに増築された木造平屋の旧制御棟が連結し、窓はすべてモルタルで塗り込められていますが、当初は6間とも東面と同様なアーチ窓でした。また、南北の妻側は、3間とも半円形のアーチ窓を設けています。小屋組は、木造の洋小屋組でキングポストトラス、屋根はスレート葺きです。

このように深山変電所本館は、重厚なつくりの洋風建築で、山間部の近代化を象徴する貴重な建造物として評価されています。



明眼寺本堂

（福富町下竹仁、登録日：平成19年12月5日）

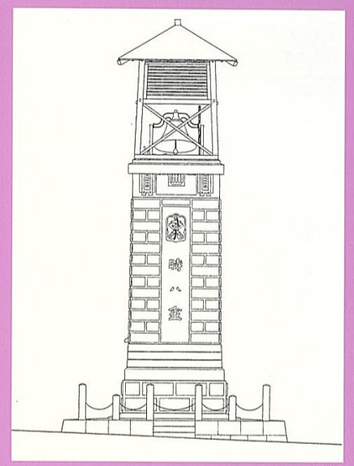
明眼寺は、16世紀中頃に開基された浄土真宗の寺院です。本堂は、現在の安芸高田市吉田町の宮大工、西谷庄一氏によって昭和13(1938)年に建てられた木造入母屋造の建築です。

明眼寺本堂の特色は、正面の間口が7間（約14m）、外陣の奥行きは4間（約10m）で、各所に西谷氏特有の優れた細部意匠を有する点です。正面向拝の組物などに大瓶束を用い、広縁の大瓶束には象の木鼻を付けるなど斬新な意匠が採用されています。外陣は、梁間４間の長大な虹梁を2本架けた雄大な構造で、高い技術を示しています。また、内陣正面の組物も氏特有の意匠によるもので、虹梁尻上の組物に斜めに肘木を出す斜栱を使い、鬼斗の上にも尾垂木を加えるなど、その独創的な意匠は高く評価することができます。

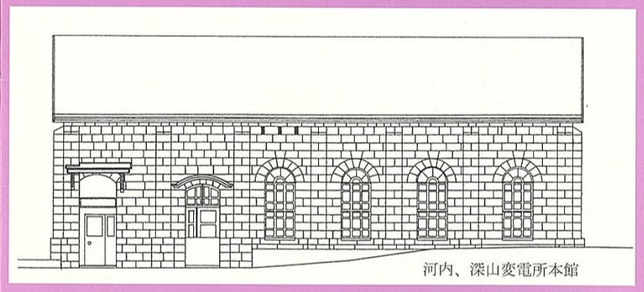
使用された材木は、内陣の正面及び来迎柱が美しいケヤキ材、その他は良質のクリ材やヒノキ材であり、漆や箔で材木を覆うことなく、白木の肌を見せることによって清楚な建築美が生まれています。

東広島市の近代化遺産

国登録有形文化財



志和、時報塔



河内、深山変電所本館

東広島市教育委員会

登録有形文化財とは

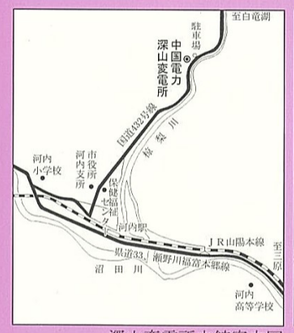
近年の国土開発や生活様式の変化などにより、消滅の危機にさらされている多種多様な近・現代の建造物や土木構造物などを登録し、後世に幅広く継承していくための制度です。

（※登録物件は、平成21年３月10日現在のものです。）

時報塔案内図

中の峠隧道案内図

呉市水道局三永水源地堰堤、三永の石門案内図



深山変電所本館案内図

明眼寺本堂案内図

（※案内図は、北が上です。）
各図で縮尺が異なります。

時報塔

（志和町志和堀、登録日：平成9年9月3日）

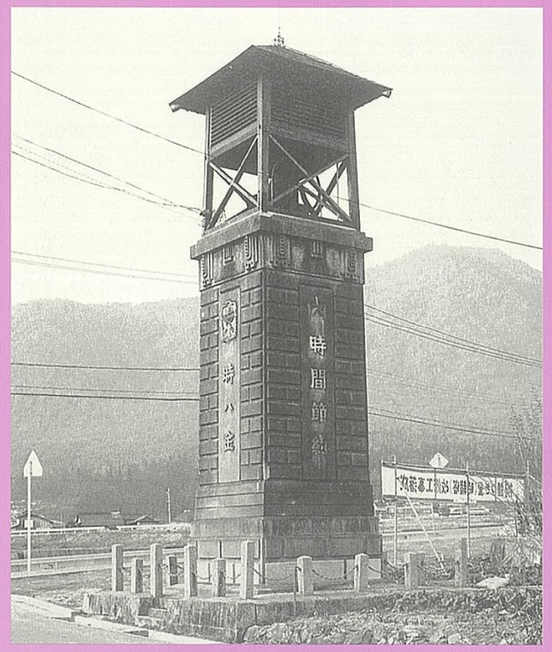
この時報塔は、地元では「覚醒の鐘」や「鐘撞堂」などと呼ばれています。

大正11（1922）年、旧志和堀村の在郷軍人会が時間励行を主唱していることを聞いた同村出身のアメリカ在住者15名が同国製の鐘を寄贈し、これを受けて村が建設した切石積の基壇上に建つ高さ7.8mの鐘楼です。

塔身部のコンクリートの外壁は、型枠に深い凹凸を付け、凸部を洗い出して石造風の味わいを醸し出し、上部にはアール・デコ風の装飾が施され、四方の壁面にはそれぞれ碑文が彫り出されています。

頭頂部の木造部分は、昭和17（1942）年に改造され、サイレンが据えつけられました。このため当初の姿より80cm程度、高さを増していますが、屋根の形状は竣工のままと考えられます。

現在でもこの時報塔は、サイレンにより時を告げる塔として機能しており、地域の人たちに広く親しまれています。



三永の石門

（西条町上三永、登録日：平成10年9月2日）

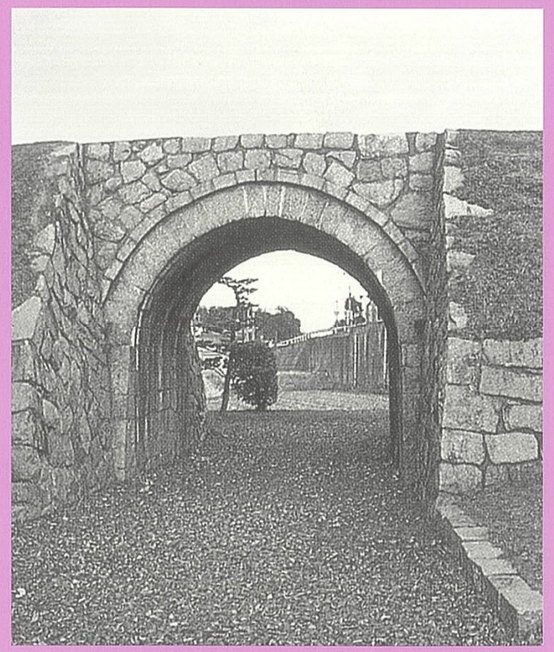
この石門は、明治初年、江戸時代の西国街道を国道２号線とするための掘削工事により、農業用水が分断されるため、農業用水路を確保するために造られた石造アーチ式の上路水路橋です。

工事は、明治11（1878）年から同15（1882）年の間、田万里村（竹原市）の近藤源兵衛が請け負い、石工は広村（呉市）の鼎（姓は不明）で、その弟子5～6名と工事にあたったと伝えられています。

橋梁のアーチを受ける板枠は、板城村の大工が楔止めで組んだようで、アーチ部は切石を用い、その上をさらに薄い板石で巻いています。幅・高さとも2間（約3.6m）で、石の厚さは1尺5寸（約0.45m）です。

昭和53（1978）年、国道２号線の拡幅工事で現在地に移築復元されました。

この石門は、本州における石造りアーチ橋として数少ない実用橋で、わが国の石橋史上、大変貴重な価値を有しており、第1級重要構造物と評価されています。



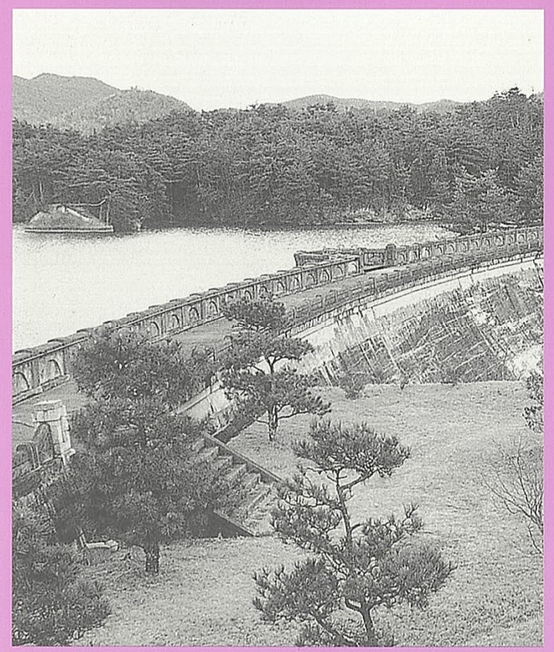
呉市水道局三永水源地堰堤

（西条町下三永、登録日：平成11年7月8日）

この堰堤は、呉市の人口の増加や昭和初期の異常小雨による給水制限などにより、上水道の水源確保を目的として、昭和13（1938）年から昭和18（1943）年にかけて黒瀬川の支流である下三永川に築かれたものです。1日の最大給水量24,500m³を約26km離れた呉市平原浄水場まで送水する計画で建設されました。

貯水池は、集水面積約68ｋ㎡、満水面積約54.4ha、容量約264万m³です。当時、農家43戸が立ち退き、村の4分の1が池底に水没したといわれています。

堰堤は、長さ100.4m、高さ18.7mの重力式コンクリート造です。取水塔は堰堤内側に沿って造られており、上・中・下の3段で取水し、送水管に水が送られています。溢水堤は東側に設置され、満水時には下流に放水されます（放水路延長約277m）。また、黒瀬川本流からも取水するために、吾妻子滝付近に砂溜池と導水堰堤などを設け、貯水池まで延長約314mの導水路を敷設しています。



中の峠隧道

（西条町郷曽、登録日：平成12年4月28日）

文化年間（1804～17）に広島藩の指導で柏原地区の開墾がはじまり、谷の奥には深道池が築かれましたが、集水面積が狭いことから、永い間干害に悩まされました。

中の峠隧道は、昭和元（1926）年の著しい渇水を契機として、柏原地区の村人であった沖田嘉市氏が計画した農業用水路の一部です。昭和2（1927）年3月25日から沖田氏1人が掘削をはじめましたが、やがて多くの村人が作業に加わり、昭和5（1930）年8月15日に完成しました。

水路の延長は約1.5kmで、隧道は全長327m、幅員0.9m、高さ1～1.2mを測る素掘りのものです。

昭和18（1943）年に改修された南側坑口は、両脇に柱状の装飾を持たない鉄筋コンクリート製で、線で円弧アーチを表現し、その内側には欠円アーチ状にコンクリートを打っています。この当時、坑口のアーチは石積みやレンガ積みのものが多いなかで、戦後に普及するコンクリート工法を早くから採用し、意匠的にも珍しいものです。

現在でも、農業用水路として地域の人たちによって護られています。